第5号
2023年6月20日

# みんなの未来きこう

発行：特定非営利活動法人全員参加による地域未来創造機構
発行責任：半澤彰浩

全員参加による
地域未来創造機構

## 2023年度の講座が始まりました。

2023年度
これから始まる講座

### 市民基礎講座＜相模原会場＞

ユニコムプラザ
さがみはらにて

### 地域を豊かにする連続講座
7/13～8/21　全4回連続講座
かながわ県民センター(横浜駅徒歩5分)

### 市民基礎講座＜横浜会場＞
8/30～10/13　全4回連続講座
かながわ県民センター(横浜駅徒歩5分)

### 市民基礎講座＜大船会場＞
9/13～10/31　全4回連続講座
大船POP-UPスペース(大船駅徒歩3分)

### 地域を豊かにする連続講座
11/1～12/6　全4回連続講座
大船POP-UPスペース(大船駅徒歩3分)

**キャリアアップ講座**人間関係をスムーズに、事業活動のマネジメントに役立つ実践的な講座

④⑤7/19(水)7/26(水)**傾聴講座**（会場参加のみ）　⑥9/14(木)**ハラスメントの知識**
⑦10/12(木)**コーチング講座**　⑧11/23(木)**コーチングの具体的スキル**
⑨12/14(木)**アンガーマネジメントとは**　⑩2/14(水)**介護過程**　★時間はいずれも10:00～12:00
★会場はオルタナティブ生活館(新横浜)　★⑥～⑩はオンライン(ZOOM)でも会場でも受講できます。

各種講座の詳細・申込はこちら

## NPO法人全員参加による地域未来創造機構 第1回通常総会および総会記念講演を開催しました。

あいさつする半澤理事長

6月6日(火)に新横浜スペースオルタにて第1回通常総会を開催しました。2022年度の事業活動報告、2023年度の事業活動方針・計画を提案・討議し、全議案が承認されました。

佐野充氏

総会終了後、総会記念講演を開催。佐野充さん(神奈川地方自治研究センター理事長)に「アソシエーション活動を豊かにするために」というテーマで講演いただきました。

生活クラブ運動は、お金をためなくてもだれでも安心して暮らせる社会をつくるために、オルタナティブな活動を創生してきているが、現実には活動の地域への浸透不足や資本と労働の造成と再生産が不十分であると指摘。その中でいま、必要なものはアソシエーションの創生による地域社会づくりであるが、その活動の地域社会への浸透や継続、組織の確立に苦慮している団体が多い。それらをサポートする中間支援組織の機能と実践力が求められると、今後の未来機構への期待を込めてエールが送られました。

(特非)全員参加による
地域未来創造機構
(略称：未来機構)

〒222-0033横浜市港北区新横浜2-8-4 オルタナティブ生活館3F
Tel:045-534-7131 fax:045-534-7151　e-mail:minnano@miraikikou.org
https://www.minnanomiraikikou.org/

地域未来フォーラム

# 地域の多様な活動が社会を変える

## 2023年3月30日(木)新横浜スペースオルタにて開催

長引くコロナ禍によって、もともとあった格差や貧困の問題が次々に表面化しました。追い打ちをかけるような世界の不安定さが、私たちの食料や生活に関わるものすべてに直結していることを実感しています。そんな中で、市民の活動は途絶えることなく、人から人へ思いをつなげながら、しなやかに、したたかに続いています。私たちは、地域で人と人が協力しあい、血の通った支援のしくみをつくり、実践を積み重ねて社会を少しずつ変えていきたいという思いを共有しました。フォーラムの記録ブックレットも作成しました。お問合せは未来機構へ。

**【基調講演】** 見えにくい貧困 ～コロナ禍での支援の現場から～ 大西連さん

認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやい理事長
内閣官房孤独・孤立対策担当室政策参与

### 「貧困」がもはやニュースにならない!?

「もやい」は生活困窮者の相談支援を年間6000～7000件受けており、ホームレス状態の方の住まい探しや食料支援をメインに活動している団体です。

2020年春からの新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、それ以前は見えにくかった日本の「貧困」があらわになりましたが、コロナ禍以前も「貧困」が社会的に注目された時期がありました。2008年のリーマンショックで職を失う人が増え「年越し派遣村」がニュースで話題になりました。「子どもの6人に一人が相対的貧困状態にある」といった数字を記憶している方も多いと思います。

コロナ禍で明らかになったのは、フルタイムの仕事を持っている人でも慢性的な低所得であったり、働いているのに生活がギリギリだという人が増えていること、そしてそのような状況がもはやニュースにならない、という現状です。

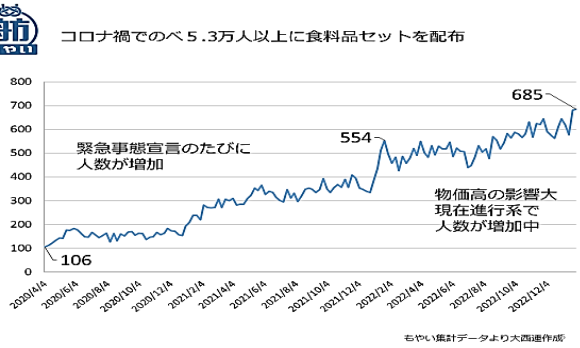
アパートを借りる人の支援も行う

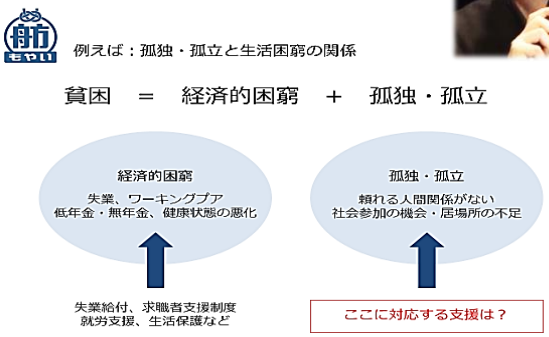
### 子ども連れで路上に並ぶ人もいて・・・

「もやい」では、2020年4月から都庁前で毎週炊き出しを行っていますが、当初100人程度だった利用者が2022年12月には685人まで増加しました（1回あたり）。そしてさらに、女性の割合が2割程度に増えたことが大きな特徴だといいます。中にはお子さん連れで並ぶ方も毎回5組程度はいるということです。

かつて2008年、2009年の「年越し 派遣村」に来る女性は多くても1%程度で、路上の炊き出しに 女性や子連れは並びにくい雰囲気がありました。それが、これだけ多くの女性が炊き出しに並んでいることが、ニュースにならないということは何を意味するのか?

経済格差の拡大や貧困が、当たり前になってしまった、潜在するニーズも非常に多いのではないかと、大西さんは言います。



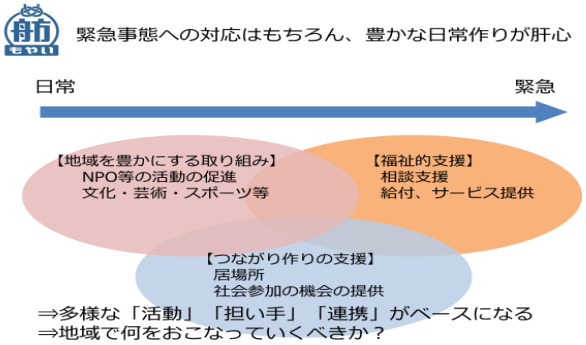




### 貧困＝経済的困窮＋孤独・孤立

貧困には、経済的困窮だけではなく、孤立や孤独も含まれます。失業などの経済的困窮は失業給付や生活保護などの公的制度がありますが、孤立や孤独による生きづらさを解決する支援策はあまりなく「助けを求められない」「生きていくのがツライ」という人が増えています。経済的困窮に対する公的支援も、周囲の人と社会的な関わりがなければ、自ら申請するのは難しいケースがほとんどです。そもそも社会構造として人と人のつながりが失われやすい背景要因があります。

いま必要なのは、公的支援に加えて、地域での多様で豊かな活動、社会参加の機会の増加など、人と人とがつながることができる地域づくりの実践です。

そして、公助を拡大させるためにも、地域での共助の担い手である市民やNPOが積極的に声をあげ、広がりをつくっていくことが重要、という大西さんのお話でした。




「未来機構」で進めている「アソシエーションが主役のまちづくり」が目指すのは、まさに地域でつながる機能をもつ居場所や小さなアソシエーションを増やし、誰もが自分らしく生きられる地域社会をつくることです。次の事例報告・トークセッションではその実践を共有し、思いを新たにしました。 （大池玲奈）

# 地域の多様な活動が社会を変える

**【事例報告】**「はたらっく・ざま」の活動から岡田百合子さん
はたらっく・ざま代表、NPO法人ワーカーズ・コレクティブ協会副理事長

**「就労準備支援事業は人と人を結ぶツールになる」**

W.Co(ワーカーズ・コレクティブ)を働き場として地域に開き、就労困難な方も包み込み、地域の労働の受け皿にしたいというのが就労支援事業のスタートの思いです。

「はたらっく・ざま」は、生活クラブ神奈川、さがみ生活クラブ、W.Co協会の共同企業体として座間市から受託し、行政とも連携し進めています。利用者はさまざまな環境から就労以前の課題を抱える方が多く、まずは生活に必要な、掃除、片付け、洗濯、調理、金銭管理などの体験から始め、就労、定着支援という順を追った基本プログラムを設定していますがなかなか順調にいく人は少ないのが現状です。

人と人のつながりが重要で、地域の生活クラブ組合員のサポーターとお互い様のいい関係性が生まれています。私たちは、制度でできる支援の限界を超えて、ニーズを見つけ、市民ができる支援のしくみを地域に広げていくことによってたすけあい社会がつくられていくと確信しています。

**【事例報告】**「たまにはみんなでごはん(めし)でも食べよう」永井圭子さん
こども食堂プロジェクト@やまと 代表

**気になるこどもに会いたくて ～つながり続けるために～**

子どもたちの孤食や不規則な生活、経済的な困窮等々…そんなもやもやした 思いを持った6人でスタート。「たまにはみんなでごはんでもたべよう」から、「たまめし食堂」というネーミングに。

子どもたちの状況から、「たまにはみんなでふろにも」で「たまふろ」、コロナ禍では食堂ではなく「たまにたく配も」で約180食の「たまたく」、そして「たまめし」に参加していた子どもたちの成長にあわせて「たま塾」にも取組み始め、無事に偏差値をアップさせて志望の高校に入学できました。いまの社会の中で、子どもたちは揺らいでいるし、親も揺らいでいます。

「たまには…」で子どもたちに寄り添い、親の気持ちもできるだけ受けとめ、継続的にかかわり、つながっていきたいと思います。

たまめし食堂も再開しました！

**【トークセッション】** 進行：大西連さん
岡田百合子さん　永井圭子さん

## Q1.連携・共同することで心がけていることや、いろいろな団体（行政や個人）を巻き込む工夫は？

**永井**さん

社協からボランティアや、食糧支援、寄付の紹介があり、フートバンクにもつながりました。ホームページをみた個人からつながるネットワークも広がっています。最近は、行政からたびたび食事やお風呂に誘ってほしい子がいるという連絡があります。行政（公助）を地域でたすけています。自分たちの活動（共助）もめざすことは同じで、ある意味協働していると考えています。

**岡田**さん

共同企業体の強みは、生活クラブの組合員（市民）を巻き込めること。生活クラブのセミナーからサポーターの参加につながっています。市の委託を受けているので、市と相談し、就労支援の実習先の事業所を探すにも座間市のネットワークを使っています。自分たちに専門性がないことが強みで、専門家ならやらないようなことを突破する力になります。

## Q2.課題や壁と感じていることはありますか？

**永井**さん

進学の問題、家庭内の親子の関係にどうかかわるか、虐待、ネグレクトにあっている子をどう支えていくか。子どもの自立、若年の出産の問題、外国籍の子どもにもどこまで寄り添えるか、など課題が大きすぎると感じています。

**大西**さん

社会構造として、家族や地域、企業の力が縮減してしまっています。それをどう考え社会的に支えていくか。その人のバックグラウンドを含めて、一人の人を個人として認めること、どう接していくのかを考えると、地域で血の通った温かみのある多様な活動がないと社会は変わっていかないということを、今日の大きな問いとして皆さんに投げかけたいと思います。

**岡田**さん

社会への入り口として体験実習や就労へのつなぎ先が足りないので市の福祉関連施設や事業所と連携する構想があります。 座間市内の社会資源のネットワークづくりです。早く実現できたらと思いますが一般就労が難しい人たちなので、細やかな気遣いや配慮ができる地域の ワーカーズ・コレクティブを増やしたいです。

---

協同組合に集う私たちの願いは、誰もが住み暮らしやすい地域の実現です。地域の方々とも連携しながら、これまでにも多様な活動を生み出してきました。この「地域の多様な活動」が、これからの地域を、社会を変えていく力になる、とあらためて気づく機会になりました。

（籠嶋雅代）

アソシエーション情報

NPO法人育ち合い広場・てとてとて

# オルタナティブスクール「まなびこ」(藤沢市)

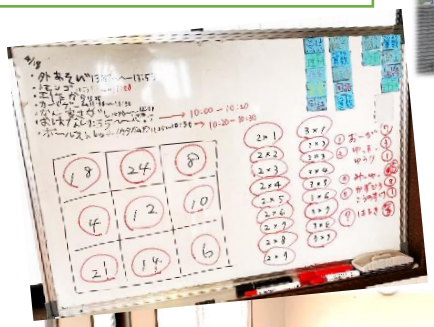
まちづくりハウス・みろくじ

藤沢市のNPO法人育ち合いひろば・てとてとては、子どもの成長や暮らしと向き合い、子どもも大人も地域の中で学び合える場所づくりをめざす市民活動団体です。4月18日、その活動の一つ「まちづくりハウス・みろくじ※」で行っているオルタナティブスクール「まなびこ」を訪問しました。　（取材：飯田厚子）

## 自ら学ぶ意欲が湧き出る環境を提供する

「まなびこ」は2022年4月に開校しました。暮らしに根ざした生きる学びを伝えること、子どもたちの活動を見守りながら温かい眼差しの中でいのちを育てること、そして「自分で考えて決める」を大切に、受け身ではない、自ら学ぶ意欲が湧き出る環境を提供することを目的としています。

訪問した日は、小学生2年生から4年生の男の子が5名参加していました。「まなびこ」が大切にしている「子どもたちが自ら学び、伸びていこうとする力を信じて待とう」という思いを感じる場面が数多くありました。



小川智子さん

## その日のスケジュールもみんなで決める

一日のスケジュールはその日に集まった子どもたちみんなで何をしたいか、何ができるのかを話し合って決めています。授業は学習指導要領を意識していますが、教材は手作り、その日は文章の中から課題とした条件に合う「漢字探し」をやっていました。教科を超えた学びで、異学年の子ども達が一緒に学びます。代表の小川智子さんが授業を進め、その日の補助は池田美幸さん。

一人ひとりの個性や違いを知り認めながら子ども同士で意見を言い合って妥協点を探ったり、前のめりになるほど子どもたちの元気な声と知識の深さに、自ら学びたいという意欲を感じる場面が多くありました。

毎日違うテーマがある日々の記録

配膳もみんなで

昼食は食事づくりのスタッフがつくった手作り給食です。給食の配膳も片付けもみんなで行います。

見学に行った私たちも頂きましたが、色とりどりの野菜たっぷりのとてもおいしい給食でした。

## 楽しく、集中して学ぶ

小川さんが自由な学び場「まなびこ」を始めたきっかけのひとつは、「てとてとて」が毎週木曜日にやっていた「手等子屋わはは」(自由参加の子どもたちの居場所)に来ていた子が「学校に行かない」という選択をしたことでした。居場所だけでなく学ぶ場も必要、どんな場所なら通いたいだろうかと考え、同志たちと話合いを重ね、始めたそうです。

最初は2名から始め、現在は20名ほどが体験登録していて、週4日通っている子どもから、月1回の参加と様々です。週4日通っている子ども達は約10名(月毎に変動あり)。年齢差を考慮し、子どもたちの合意づくりや、授業中は楽しみながらも集中して学ぶことを大切にしていました。屋内での学びだけでなく森や川、田んぼなど野外の体験も多くあり、この日の午後には近くの公園での運動を体育の授業として行っていました。公立学校の出席認定に必要な手続きも行っています。

## 自らの意思で居場所を見つけられる社会へ

今回、子ども自らが「まなびこ」を選択して通っている姿をみて、人は多様であるので、多様な学びの場がもっと必要であると思いました。自分で選んできている子ども達は生き生きとして楽しそうでした。ここに通っている子どもたちは親の理解や周りの環境もあって、「まなびこ」を選択できましたが、学校に行けない子どもたちが自らの意思で自分の居場所を見つけられるような社会になっていければいいと感じました。

（いいだあつこ）

※「まちづくりハウス・みろくじ」：藤沢市初の空家利活用事業補助金を活用し、現在4団体で借り、共同使用している。通称はみろくじハウス。

発行：2023年3月20日
発行者：（特非）全員参加による地域未来創造機構(略称：未来機構)
〒222-0033横浜市港北区新横浜2-8-4 オルタナティブ生活館3F
Tel:045-534-7131　Fax:045-534-7151　E-mail:minnano@miraikikou.org